芝浦工業大学　工学部　建築工学科
2000年度卒業研究梗概集 K00- 47

城下町岸和田における都市形成史研究

k97087　中井　学

Ⅰ　はじめに

Ⅰ-1　研究の目的

本研究は、大阪府岸和田市の城下町における都市形成について、実測調査・聞取調査・史資料ならびに先行研究を参考に研究を進めていくものである。本研究の目的は、以下の２点である。

①正保・元禄・幕末頃の岸和田城下図により近世から現在までの岸和田城下の発展および変遷を理解し、城下としての位置付けを行う。

②城下町岸和田における郭内町の武家住宅及び郭外町の武家住宅の平面構成上の類似点、相違点を明らかにする。

Ⅰ-2研究の方法

研究の方法を以下に示す。

①絵図資料の収集を行い、各々内容を精査する。

②現在から昭和，大正，明治，幕末，元禄，正保と時代を遡っていき，復原図を作成する．そして復原図を現状と比較する。

③岸和田城下に現存する伝統的住宅の中から調査対象家屋を選定し，実測調査，聞取調査、及び写真撮影を行う。

④聞取調査と痕跡調査より、③の建設当初の平面図を復原する。郭外町の事例については先行研究で調査されている郭内町の武家住宅とともに平面の模式化し、平面構成の比較を行う。

Ⅱ　岸和田城下に関する絵図史資料について

岸和田に関する主な絵図史資料は表１の通りである。

表１絵図史資料リスト

岸和田村検地帳〔文禄３(1594)年〕
正保期岸和田城下図〔正保２(1645)年〕
岸和田城図〔承応２(1653)年〕
本町絵図〔明暦元(1655)年〕
岸和田城図〔延宝３(1675)年〕
元禄期岸和田城下図
幕末頃岸和田城下図
道中記

表１の史料を用い、絵図による年代別比較を行った。変遷過程を以下にまとめる。

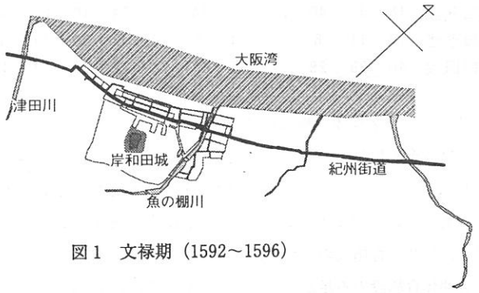


図１　文禄期（1592～1596）

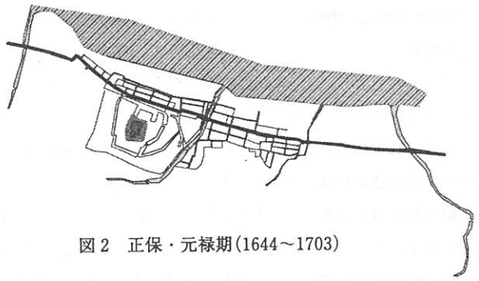


図２　正保・元禄期(1644～1703)

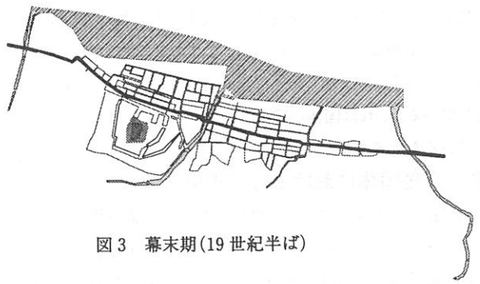


図３　幕末期(19 世紀半ば)

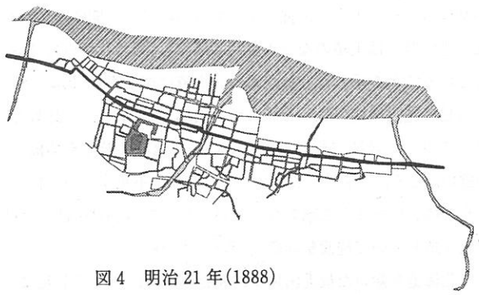


図４　明治 21 年(1888)

指導教員名　伊藤洋子教授

正保期以前　【成立期】(図１)

永和 4(1378)年に山名氏清和泉守護が和田氏の一族信濃泰義を岸和田に置いた。このときの古城を現在の岸和田城の二の丸付近に移したと伝えられ、この頃が岸和田城の起こりといえる。当時は土居構えの城であった。岸和田城が本格的に整備されるのは、天正 11(1583)年秀吉が大阪を天下の地と定め、築城をはじめ、岸和田へ中村一氏を入れ置き、根来寺に対する備えをさせた頃から岸和田城城郭が整備されたといえる。この当時は二の丸付近まで海が迫り、天守もない掻き上げ城であった。元和元年(1615)大阪夏の陣で豊臣氏が滅び、徳川幕府は「一国一城令」「参勤交代」を打ち出し、街道整備が始められた。岸和田城へは元和 5 年(1619)松平康重が 5 万石で入城し、岸和田藩が成立した。

正保期～元禄期　【拡大期】(図２)

寛永 17(1640)年岡部宣勝が藩領を引き継ぎ入城し、松平のあとの城下町の根本的な整備を行った。従来あった三の丸の外郭に西に一重、東に二重の堀を加え、これによって城内に取り込んだ百姓８軒を池の新町に移し、東西の外郭に寺院を集中し寺町をつくっている。南の守りとして津田川の段丘状に上田岸をいう土堤をつくり、松を植えるなどし、手狭になった城下町を南は南町に続き南の新屋敷、北町に続き沼領の新屋敷(現在の並松町)として拡げ、下級武士や専門職等を配して北は野村石橋から南津田村石橋まで約 1.646ｍを城下としそれぞれの末端を桝形で固めている。また海岸線も遠のき、浜手の石垣の外にも町家や蔵が建ち並んでいたと考えられる。

元禄期～幕末　【再整備期】(図３)

江戸後期文化 14 年(1816)に古城川河口に港が整備されている。また「士族卒禄高取調原帳」や「古今重宝記」より当時の城下町は約 2000 軒以上の家屋敷で構成されていたと考えられる。

以上より近世の岸和田城下の特徴をまとめる。城下町に関する都市プランの類型、および町人地町割の基軸の向きによる類型に関し、表２、表３にまとめる。表２の分類より岸和田城下は総郭型から内町外町型へと発展していったと考えることができる。また城から海までが近く紀州街道が城と海の間を通るため、同街道が目抜き通りとなって城下町が街道沿いに発展していった。つまり岸和田は横町型の城下町といえる。さらに近代における岸和田の変容を示すと以下の通りである。

明治～　【転換期】(図４)

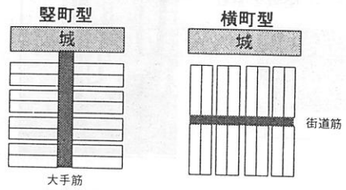
明治から昭和にかけて甚与茂、利吉、元吉の寺田三兄弟が日紡、寺田銀行、帝国産業(現テダック)を設立し、産業振興の面で岸和田の発展に貢献し、また自泉会館、五風荘、元睦会館など三者三様の意匠の建築を残し、文化振興の面でも貢献した。

表２　都市プランに関する類型

類型	説明	事例
戦国期型	城と城下の垂直的な隔たりと、城および給人居住域と城下町との水平的な隔たりが大きく、住居区分も未分化で、武家地、町人地、寺社地農村が混在した分散的な配置を取る。	二本松　岡、高取
総郭型	土塁や堀からなる外郭で城下町を囲繞する点を特徴とする。関が原の戦以降の城下町にも見られるが、　天正・文禄期に卓越する類型である。多くの城下町がこの型に該当し、地域的にも畿内と西国の城下町に数多く分布する傾向がある。	徳山　高松　長岡 松江　姫路　津 鳥取　大垣　萩
内町外町型	総郭型と町郭外型の中間に位置づけられるものである。主要な町人地を武家地とともに外郭内に配し、それ以外の町人地を足軽屋敷や寺社町とともに外郭の外に配したもの。	彦根　徳島　岡山 福岡　博多
町郭外型	外郭内には武家地のみが配され町人地、寺社地、足軽地、すべて郭外に置かれたもの。関が原の戦以降に建設された城下町に多い。戦国期の城館と回りの都市的蓄積を継承しつつ形成された城下町に多く見られる。	松本　山形　福井 宇都宮　会津若松 米沢
開放型	元和偃武以降に成立した城下町に見られる。町人地に加えて武家地すら外郭で囲繞しないプラン。	鯖江

表３　町人地町割の基軸の向きによる類型

類型	説明	事例
縦町型	「縦町」「竪町」「立町」は、町屋敷や武家屋敷の表口が主として連なる目抜き通りに与えられた名称である。これら目抜き通りが城の大手門に至る道筋となるプラン。全体のプランは、領国中心としての城と城下町の存在が強調される空間構造が成立し、町の配列では、大手門近くが「頭」そこから隔たった場所が「尾」という関係が生じ、町地の中心と周縁の間に格差が生じやすい点が特徴である。	長浜　三原　大阪 近江八幡　大和郡山 高山　松本　浜松 会津若松　和歌山
横町型	「横町」とは町屋敷や武家屋敷の表口が面しない主要ならざる「脇通り」「筋」に対して用いられる呼称である。これらの主要ならざる「横町」の通りが城の大手門に至る道筋となるプラン。全体のプランは城下を貫く街道筋が目抜き通りとなり、城を中心としつつも、他の城下町や三都との交通動脈を重視した空間構造を呈する点、町人地の間に「頭」「尾」の格差が生じない平等性が得られる点が特徴。	伏見　松江　中津 米子　膳所　米沢 府内　福岡　彦根 佐賀　篠山　高田 大垣



Ⅲ　岸和田市における伝統的住宅の調査

実測調査の対象は、旧郭外町にあたる福井英作邸(筋海町)、掃部八七七邸(北町)、旧郭内町の五風荘(岸城町)である。調査建築概要を次に示す。

福井英作邸

建築年代は聞取りによると文化・文政時代頃（1804～1829）であり、金穀吟味役・加藤半兵衛の屋敷であった。石高は 50 石で扶持は 12 人であった。住宅は北面と西面が道路に面している。間口は約 9 間、奥行は約 5 間である。通り土間の奥に８畳の食堂があり、手前は玄関で寄付を通って座敷にアプローチする。奥座敷６畳と食堂の間に 10 畳の寝室がある。玄関の天井は大和天井であり、小屋組は叉首組である。茅葺の屋根の上にトタンが被せてある。玄関と座敷の間に玄関の間、寄付と 2 室が設けられている点、寄付に小さい床や壁に円窓があるなど、武家住宅の特徴が良く出ている。

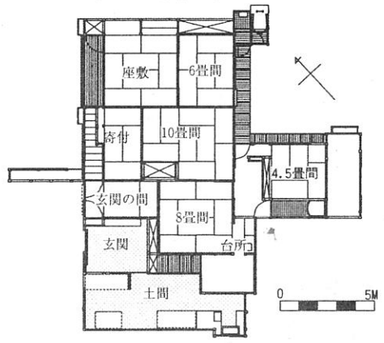


図５　福井英作邸平面図

図６　福井英作邸断面図

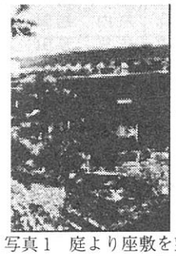


写真１　庭より座敷を望む

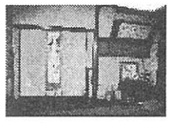


写真２　座敷書院

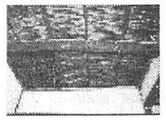


写真３　大和天井

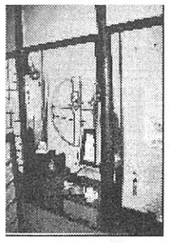


写真４　寄付丸窓

掃部八七七邸

建築年代は聞取りによると大正初期である。旧横目付・加藤半兵衛の屋敷であった。石高は50石で10人扶持であった。間口は約７間で、奥行ば約４間である。福井邸と同様、通り土間にそって手前に玄関、奥に炊事場と食堂があり、玄関から座敷へのアプローチも同じである。しかし、食堂奥は１室であることが規模の差となっている。小屋組みは和小屋で杉皮葺きであった土間部分は現在、瓦葺きになっている。

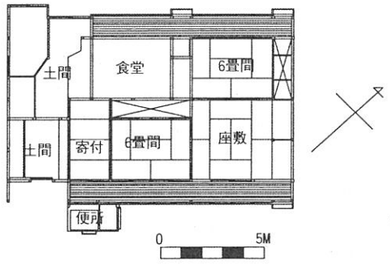


図７　掃部八七七邸平面図

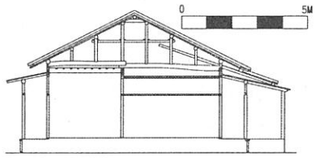


図８　掃部八七七邸断面図

写真５　庭より玄関を望む

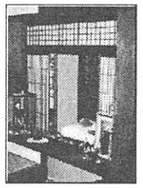


写真６　付書院

五風荘

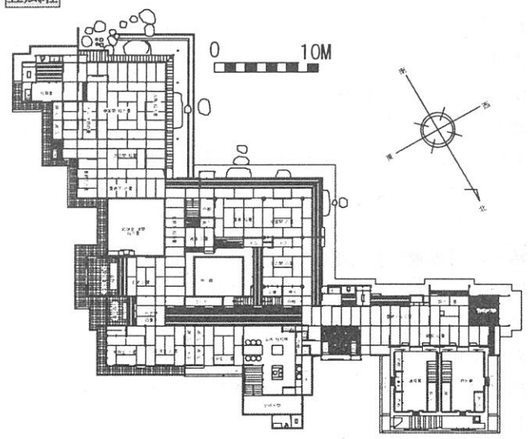
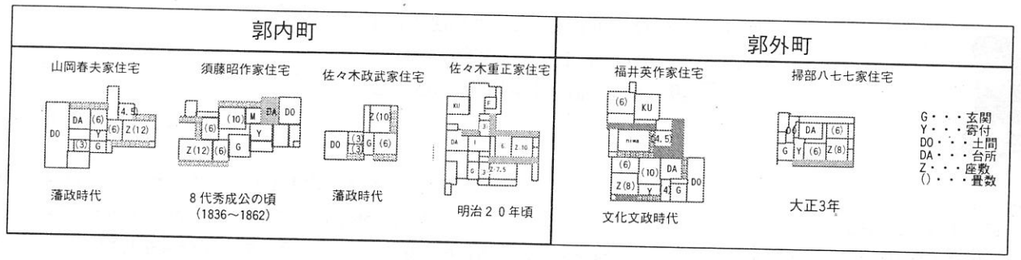


図９　五風荘平面図

表４　岸和田郭内町郭外町の武家住宅各平面



寺田利吉氏（７代岸和田市長）が昭和４年から１０年という歳月を費やして建築した別荘で、約７０００㎡の敷地には、３つの茶室と回遊式庭園がある。城下町から近代都市への転換を果たした岸和田の産業振興のシンボル的な大型住宅である。

写真７　付書院

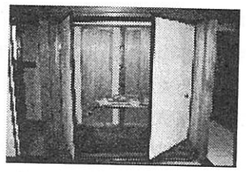
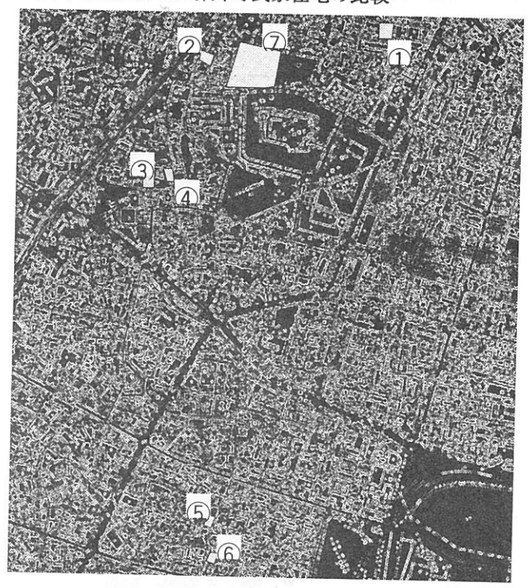


写真８　神棚

Ⅳ　郭内町武家住宅と郭外町武家住宅の比較



①山岡春夫家住宅　②須藤昭作家住宅　③佐々木政武家住宅
④佐々木重正家住宅　⑤福井英作家住宅　⑥掃部八七七家住宅
⑦五風荘

図 10　郭内町・郭外町武家住宅の分布地図

岸和田城下の郭内町の侍住宅については先行報告書「岸和田市歴史的景観物等調査報告書」がある。平面の模式化を行い、表 4 に各平面の比較を示す。これによると、郭内町(岸城町)の佐々木重正家住宅と郭外町(筋海町)の福井英作家住宅の平面構成は基本的に類似している。他の住宅も玄関を挟んで一方に座敷などの接客部分と他方に台所、土間などのプライベートな空間を配している点で共通項を見出せる。山岡春夫家住宅、須藤正作家住宅は玄関から土間や台所にアプローチするまでに一室設けてられているが、ここに武家住宅としての身分の違いが出ていたのではないかと考えられる。

Ⅴ　結論

岸和田城下は総郭型から内町外町型へと発展していったと考えることができる。即ち、天正・文禄期に成立をみたが、後に徳川系の城下町として発展をした城下町の一例と考えることができる。また城から海までが近く紀州街道が城と海の間を通るため、同街道が目抜き通りとなって城下町が街道沿いに発展していった。つまり岸和田は横町型の城下町をいえる。また武家住宅とその系譜の住宅平面に関しては郭内町の住宅と郭外町の住宅の平面構成は基本的には類似しており、玄関を挟んで一方に座敷などの接客部分と他方に台所、土間などのプライベートな空間を配している点で共通項を見出せる。これは当時の北町一帯が郭内町と同等の町であったことを裏付ける要因のひとつであるといえる。

謝辞　調査に協力して下さいました皆様心よりお礼申し上げます。

参考文献

玉谷哲　「復原体系　日本の城　5.近畿」 1992 昭和礼文社
大越勝秋　「日本城下町絵図集　近畿篇」 1982　ぎょうせい
大越勝秋　「城下町としての岸和田市」 1951　岸和田市教育委員会
高橋康夫ほか編　「図集　日本都市史」 1993　東京大学出版社
「岸和田市歴史的景観建築物等調査報告書」 岸和田市　1994
「本町　岸和田本町地区街なみ環境整備事業　事業計画策定にむけて」－1994
「岸和田市史」岸和田市史編纂委員会編　1976　岸和田市
「貝塚市史」 臨海貝塚市史編纂部編　1955　貝塚市